

第7分科会 乳幼児保育部会

演題「乳幼児期の育ちと保育的課題」

講師 公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構

副理事長 安家周一先生



はじめに

現代社会は、コンビニエンスストアなどいつでも店が開いていて、深夜に子どもたちが出入りをしている。先日、殺された女子中学生も周りの子ども達の話からひどい家庭でもないと思う。普通の女の子が遅い時間に男の子と歩く時代になっている。いつでも冷たい飲み物が買える、便利で快適な時代になってしまっている。昔、冬になるとしもやけやあかぎれができてしまうという厳しい自然環境が、私達の先生だった。耐える力、工夫することが身についていた。私の子どもの頃は100円のものを買う時には手が震えていた。お店のおばさんが「さんのところのちゃん、なんで100円もってるんや」といいながら母親へ報告がいき、お財布からお金をぬいたことがばれていた。このように、周りのネットワークの中で見守られていた。現代は、ノーコントロール人たちが、今、育ちつつある。このような時代に私たちは、乳幼児期の子ども達の教育に関わっている。ということは、過去に比べて大変重要な役割を私たちは、担っているのだということに自覚するために、この分科会を進めたい。

人は生まれてから、3歳、10歳と育っていく。私たちは、発達という言葉をよく使っている。発達の曲線のイメージは、右肩上がりで質と量が増えていくイメージを持つ人が多いが、これは間違いである。

赤ちゃんが生まれて、脳内に細胞が沢山増殖していく。細胞と細胞がつなぎ合わされて物質が形成される。例えば、言語を例に挙げれば、胎児はお母さんの言葉のシャワーを浴びて育つ。生まれた後は、しゃべることはできないが言葉を聞いて育つ。2歳になると浴びせられた言葉の中から選んでしゃべる。誰にも教えられなくても日本語を取得している。2歳位になると、もともともっていたLとRの発音を聞き分ける細胞は消えていく。脳は人間がどこで生まれてもいいように、最初はフルステップがそろっているが、年と共に細胞は消滅し整理されていることが分かっている。発達という言葉で右上がりに考えていると質と量を大きく促すことだけに力が入るが、発達は増えもするが減りもする。全体の発達を捉えていかなければならない。

教育の場合は、子ども達の調子がいいときは、どんどん獲得してうなぎのぼりのように育っていく姿が見えると嬉しく思うが、ある時、パタッと止まると発達していないと見てしまい、なんとか元の姿に戻そうとする。しかし、人間はジャンプをする時に必ず、膝を曲げて

跳ぶように、発達もスピードが緩くなった時は、次へのジャンプの準備なのだ」と保護者と共有することで、親も納得しこの時期をあたたく見守ることができるのではないか。

子ども・子育て支援新制度の背景と課題について

今、幼児教育の制度が大きく変わろうとしている。このことで、さまざまな問題が幼稚園の先生に降りかかっている。私には関係ないでは済まされない、この時代に幼稚園に務めている限り知っておかなければならないことである。

今回の制度は、「子どもの環境をよくしましょう」「子育て支援の環境に力を入れましょう」の2点が追い求められている制度である。しかしながら、子育て支援の方へウエイトがおかれすぎていないかが、大きな課題となっている。私立の幼稚園の先生は、保育所のようになるのではないかと危惧し、全国で8000の幼稚園のうち20%しか移行をしていない。その背景について考えてみる。

2040年には、約半数の市町村が消滅するという衝撃

少子の時代、都市圏への人口集中化、就労社会として生粋幼稚園の後退

- ・老齢化してくると、都市部に人口が密集してくる問題が加速している
- ・女性が働くのは、指先だけの産業が増えたから、例えば、パソコンだけでできる仕事であったりパワーを必要としない時代となった。
- ・幼稚園は、専業主婦の子どもが通う所というのは、過去の話である。だから、子育て支援新制度が必要となる。

これからも続く待機児（2015年4月豊中市253人）

- ・共働きだから保育園を探すだけでなく、保育園に入れたいから仕事を探す女性も増えてきた。

取り残された4号児、家庭保育の支援

市町村が所轄行政になる弊害

- ・私立幼稚園は都道府県に所轄がある。公立の幼稚園、保育園は市町村が所轄である。この制度は、補助金の出所を一緒にしようとしている。私立の幼稚園は、親が園を選択しているので、隣接の市から通わせることも可能である。しかしながら、障害をもった子どもの支援は、市内の子どもであれば面倒はみるが、市外は見ることはできない。県の所轄であれば、市外の障害を持った子どもの補助もしてくれる。このような問題が新制度では起こってくる。

乳児期から幼児期にかけての連続性と非連続性について

これからの幼稚園は、新制度の中で乳児を保育しなければならない可能性があるので、乳

児の保育の連続性と乳児から幼児にかけて連続しない保育について考えていかなければならない。

人間は価値観の違った人と社会生活を営まなければならない環境に置かれることがある。色々な環境に置かれたときに、自分の中で受け入れながら微調整する力は人間にはある。自分には無理かもしれないが、努力をしてみようとする気持は、乳幼児期に育まれてくる。2011年生まれの人(現在の4歳児)の65%は、現代にはない仕事に就かなければならない。例えば、車を販売したり受け付けなどの仕事はなくなる。新指導要領が平成30年に策定されるが、そのテーマは「アクティブラーニング」である。即ち、アクティブに学ぶことである。知識だけ教える先生も必要なくなってくる。単なる知識は端末(PC)で調べる子どもの方が先生以上に知っていることがある。また、地球には、70数億の人類が存在しているが、30年後は、100億を超えるといわれている。そうなると水、食料、空気が不足していくので、宇宙へロケットを飛ばし、人類が住めるところを探している。私達、保育者は、このような時代に生きていく子どもを育てなければならない。人類が幸せになるための想像力が試される時代がくる。共存することが大切であり、自分もOKであり相手もOKであるという、丁度のところで折合いをつける力が必要である。これは、国際関係を見ても分かると思うが、交渉の基本である。

次に1歳児の保育について考えてみると、ある時は、噛み合ったり引っかき合ったり押し倒したりしているが、一つの遊具を共有している時もある。3人が同じガラガラのおもちゃで遊んでいるのに相手のガラガラをとりに行って、相手を噛みつこうとしたりする様子のビデオを、懇談会において保護者と一緒に見て話し合った時に、保護者から「おもちゃが欲しいのではなく、遊びたかったのではないか」との言葉がでた。7ヶ月どもは、まだ言葉がでないので、被害者、加害者の意識はないことを、保護者と理解することができた。乳児期の課題と幼児期の課題は連続しているものもあるししていないものもある。乳児期の課題は、個別の対応が大切である。個別の支援をしながら子どもの発達を促すように努力をする。保育内容のほとんどが、食う・寝る・遊ぶ・排泄である。次の段階で何を用意すればよいのかなど個別指導計画に書きこみを行うなど丁寧な指導をする。排泄については、徐々に紙おむつから布おむつに切り替えることを実現した。最初、親たちは反対したが、家庭では紙おむつでもよいが園では布おむつに変えてもらう儀式を続けると、親が子どもに向き合うことができ声をかけるようになってきた。子どもは情緒が安定してくる。おむつ交換も一対一の関係になり大切な時間となってきた。先生は、毎日おむつばかり換えていることに、不満がでてきた。幼児を担任した先生は翌年乳児をもたせると、何かをやらせたいと思ってしまう。しかしそうではなく、食べること、寝ること、遊ぶこと、排泄を交換することに意味がある。この時期の子ども達の課題は、親しい大人との愛着(アタッチメント)の形成である。母親

が我が子に対してのアタッチメントではなく、親しい人とであればよいと書き換えられた。園で安定すると家庭では、子どもがぐずらないので、ゆったりとした家庭生活になり園でもゆったりと過ごす。

紙おむつをつけた瞬間に、親御さんの子どもの排泄について関心がなくなってくる。子どもは、大人目を見るようになる。乳幼児期の発達の一つ目は、イメージである。脳の機能は、生後10ヶ月からでてくる。その時、脳内革命が起こる。人間が人間らしい脳に変化する。授乳をしているときに、母親の温かい言葉、母親の匂い、肌ざわり、抱かれ方を感じて、生活をし、10ヶ月の時にイメージが誕生する。二つ目は、記憶をして思い出す。ピアジェという学者が保存という概念で証明をした。海馬のネットワークは過去、現在、未来と切り分けながら考える力を培っている。三つ目は、物の統一性認識ができるのも10ヶ月の特徴である。物は、見えなくなってもなくなる。赤ちゃんが喜ぶ、「いないいないばあ」の遊びは、隠れていた顔が後から出てきて驚くとともに安心して顔があるから笑う。なくなる物の認識ができるのが、10ヶ月革命といわれる。

だから、記憶をして留めておく能力により小学生になって作文が書ける。人間は、経験することがとても大切であり、乳幼児期がいかに大事であるかが分かる。

次に幼児期についてであるが、乳児期の保育の課題と幼児期の保育の課題は連続していない。ある意味では、全くやり方が違っている。ここのところを理解しないで、認定こども園を行っている園があるが、ナンセンスである。3歳未満の子ども達の保育は、その子どもの生活のありさまやその子ども自身の特性、そういうものが丁寧に見取られた中で一对一の関係を保ちながら保育が進行している。3歳になると、教育課程があり指導計画を作り、イメージしながら保育をしていく。一斉にやるが、気付きや労働性や協力性は、一人一人違っている。

かえで幼稚園の運動会の取り組みについてのビデオ観る

- ・かえで幼稚園は、自然に恵まれシンプルで純粋な環境の中、毎年プロジェクトの形で運動会に取り組んでいる。ビデオを観ての感想もあると思うので、各幼稚園、教育課程の中での行事について、周りの人とディスカッションをする。(20分間程度)
- ・行事を見ると、その園の一年間の生活が分かる。日頃の保育者と子どもへの関わりや関係性も分かってくる。ここで言えることは、行事だけを変えようとするのは、無意味なことである。日頃から、みんなが話し合ったり、どんな意見をいってもバカにされない、み



んなに認めてもらえる関係性が基本のところでは成立しておかないと、かえで幼稚園のようなことはできない。

発達常識については、以前から、日本の小学校、中学校の教育は、ピアジェの理論がベースである。“単純なものから複雑なものへ”“モデルを示して、反復練習をさせるとだんだん身についてくる”というピアジェの理論は教育界に浸透している。武道や茶道など“道”とピアジェの理論がくっついて形から入って中を充実させる。しかし、この理論がおかしいとの反論もでた。胎児や新生児を自然のまま観察すると、彼らが決して外からの刺激によって動かされているのではなく、自発的に運動し自らが外に向かって語りかけている。アクティブラーニングに変わると能動的な学習となる。認知的、論理的、社会的が大切とされる。発見学習、問題解決学習、体験や調査、ディベートの学習に変わる。まさに、かえで幼稚園の教育である。

小学校以降で教える内容とは違うが、幅であったり高さ、物が倒れないようする空間の考え方も入っている。話し合いもディベートしていた。一連の活動の中に小学校以降で学ぶアクティブラーニングの要素が幼児期の教育の中に入っている。それを、幼児期の教育を担っているものと理解し咀嚼して子ども達の保育の中で展開しているかどうかである。幼児期に獲得したい力の目安として、自らを信じる力 人と関わる力 我慢をする力 みんなで〇〇すると楽しい 工夫し探求し創り出す力 持続して歩くことができる 自然の中で楽しむ力、をねらいとしている。かえで幼稚園は、一斉保育の中で、一人一人学んでいる内容が違っている。友だちの意見は誰も否定をしないで、こんな考え方もあるんだという自由性が保たれている。これが幼児期の教育の特徴である。

小学校の教育は、学習指導要領があり、教える内容が決まっているが、新しい教育要領は違っている。教科書まるごと暗記では、想像力や発展力は育ってこないことが分かった。小学校教育は、認知能力が問われる。学習指導要録は、「を学習する」ことが、目的である。人間が過去から蓄積した文化の伝承をすることが今までの学習指導要録の大きな目的である。アクティブラーニングは、非認知能力であり好奇心を総動員して能動的に学ぶ力であり、ECECで非認知的能力が大切であることを言われてきた。幼稚園指導要領は「で遊ぶ(学ぶ)」この子に何が育っているか、だからこそ個々の記録が大事である。小学校では、読む力、書く力であるが、幼稚園は、話す力と聴く力である。早くに文字を知らせると、話す力より書くことに夢中になり、話す力が育っていないので文章能力は育たない。幼稚園で文字を教えるはいけない。そのようなライセンスは持っていない。しかし、話したり聴いたりする力は育てないといけない。その基本は、心が揺さぶられる経験である。文字を自分で学ぼうとすることを妨げる必要はないが、教えるはいけない。心が揺さぶられる経験がベ

ースにあり、自分もやってみたいという意欲を育て、できた！という達成感を味あわせる。順番を守らないと面白さが持続しないというルールを守る態度の形成をさせる。心情、意欲、態度、これが幼児の特性である。幼児教育と同じようなことを小学校がやっていこうとしている。子どもがドングリを並べている時に、保育者が数の遊びをしていることに気付かなければならない。環境さえ用意すれば2歳児でも数の遊びをしている。子どもの姿から子どもの育ちを感じとれる保護者の姿もみられるようになる。小さな子どもの変化に親が気づくことは、大切な事である。私達は、ホモサピエンスである。ホモサピエンスだけが地球で生き残った。長時間研究されて、DNAの解析で明らかになった。私たちは食われて絶滅する危機をまぬがれた。その為に、集団を構成して1年というサイクルの中で子育てをした。今は3歳児まで家庭の中で育てている。一人では育てられない。そこから見えてくる幼稚園の課題は、家庭で子育てをしている人たちを園に招き入れて、集団の子育てサークルを作っておくことである。これが、ホモサピエンスから学んだことである。そうすると、だんだんトレーニングされて、我が子だけでなく、他の子も目に入ってくるようになる。今は孤立し、マンションなどで虐待が起こる。他の集団とコミュニケーションをとるためには、笑うこと、次に食べ物をあげること。この集団は150人が限界である。安定した数値であるとされている。平日、お母さんと遊ぶ子どもが増えている。放課後、友達と群れて遊ぶなくなった。園では群れて遊ぶ楽しさをしっかり経験させていかなければならない。ちょっとしたことで、すぐけんかにならないように、集団での子育てがいかに大切なことであるかが理解できるのではないか。

報告者（公財）広島県私立幼稚園連盟広報委員 石川 裕子 聖慈幼稚園